

ふる 旧き市民も、新しき市民も、共に協同一致 市民的自覚と、不断の努力とをもって…

万博開催が迫ってきたが、今年は、大正14(1925)年に「大大阪」が誕生して100年目の記念の年でもある。

「大大阪」とは、大正14(1925)年4月1日、第2次市域拡張で東京市を抜き、日本第1位、世界第6位となった大阪市をさす。人口を昭和2(1927)年版の『大阪市統計書第25回』によると次のように、わずかながら当時の東京市を抜いている。

ニューヨーク	597万人
ロンドン	455万人
ベルリン	403万人
シカゴ	310万人
パリ	290万人
大阪市	225万9000人
東京市	214万3200人

「大大阪」誕生までの大阪市の歴史をふりかえると、明治元(1868)年、大阪府が設置され、明治8(1875)年、旧大坂三郷が第1大区から第4大区までの四つの区となった。明治12(1879)年、それが東区、南区、西区、北区の4区に名称がかわる。

明治22(1889)年、この4区を大阪市として市制が施行される。この時は、市長を市民の選挙で選ばず、大阪府知事が市長職務を兼務した。これを「市制特例」と呼んだ。東京、京都の市長も同じだが、この時代の知事は国が任命する勅令管であり、最重要都市を国の統制下にとどめたのである。

しかし明治31(1898)年、「市制特例」が廃止され、大阪府から大阪市は独立し、市長選挙で初代大阪市長に、心齋橋筋の呉服商・丸亀屋の田村太兵衛(1850~1922)が選ばれた。

そして市制がしかれてから36年目の第2次市域拡張で、新淀川以北や都島、東成、生野、平野、住吉ほかを加えて「大大阪」となった。

本欄でも、誕生100年にちなんで「大大阪」の話を紹介していきたいが、手始めに編入時に何が問題とされたかを大阪朝日新聞の社説「大大阪の建設」(大阪朝日新聞・大大阪記念号、大正14年4月1日)から抜粋しよう。

「(前略)今日までの過程を顧みると都市建設の重点は、主として外形にあつて内容になく、量にあつて、質になかった。三年ゆう邑(村のこと)をなし、十年都をなすといった風に、何の計画もなく、秩序もなく、時日の経過中



近代建築が建ち並ぶ大大阪。堂島川の向こう、左が大阪中央電信局、右が大阪商工会議所。『大大阪橋梁選集』より

にむやみに人口が集中して、住民の一大集団をつくったものに過ぎない。この情態から脱却するために近代都市の建設はその重点を専ら内容と質におき、種々の改良事業、都市的施設を完全にせんとして努力し、わが大阪市のごときも、この点に非常なる苦心を払ひつつあるが、なかなか思うように進捗せず、市民をして切に焦躁の感を懐かしめつつある。」

それまでの都市は無計画に町が膨らみ、大きくなったに過ぎないが、近代都市の建設は人口などの量的な基準ではなく、都市の価値を内容と質におくべきと指摘し、つづけて編入地域の問題に触れる。

「然も今や又接続町村の編入によって、一層都市的施設の稀薄にして不完全な部分を新たに市域に抱え込んだのである。是れ、既に手許に容易ならぬ大事業を控えながら、更に一大原生林の開拓を引受けるにも等しい大責任を背負い込んだものである。」

『大大阪記念博覧会誌』(大阪毎日新聞社、1925年)を見ると、編入された接続町村には「純農村」も多く、社説はそれを「都市的施設の稀薄にして不完全な部分」とし、「一大原生林の開拓」にたとえる。確かに古くから都市化していた船場や島之内などと、編入された「純農村」の住民とは、利害関係や考え方も異なっていただろう。



『大大阪記念博覧会誌』に「純農村」として写真掲載された長居村(現・大阪市東住吉区)。のどかな田園風景が広がる。

そして結論である。

「斯くて真の大大阪の建設は、寧ろ今後の事業に属する。区域拡大のけふの記念日は大に祝すべきの時であると同時に、大に責任を感じべきの時である。吾人(「私たち」の意味)は、旧き市民も、新しき市民も、共に協同一致、市民的自覚と、不断の努力とをもって、この責任を果すべく精進せんことを切望する」

「大大阪」建設は今後の課題であり、古い市民と新しい市民が連帯してよき都市をつくるのが責任とするのである。国民や市民は団結すべしという理念は、「大大阪」建設で意識されていたわけである。

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学名誉教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室(現・大阪中之島美術館)から大阪大学総合学術博物館に移った。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂一なにわ 知の巨人」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ—増殖するマンモス/モダン都市の現像—』(創元社)など。